The Tulip Touch における「語り」の役割

The Role of Narrative in *The Tulip Touch*

海老塚　日菜子*
Hinako EBIZUKA

要　約　本稿は Anne Fine（1947-）著，*The Tulip Touch*（1996）の中で語り手の Natalie が用いた語りの技法を解読する試みである。Natalie による回想型の語りを分析すると，当時の自分を自己弁護するために Natalie が自身の都合によって語りを歪めていることがわかる。Natalie は Tulip の邪悪さに読者の目を向けさせ，自身の悪さや家庭の不完全さを隠しているのだ。また一方で，本研究は Natalie の語る回想のなかで「物語る Natalie」と「物語られる Natalie」の二人に分けてそれぞれの心情の変化を分析した。その結果，すでに終わった過去の記憶を語っているだけの Natalie にも心情の変化が見られ，回想を始めた当初には語れなかった自身の弱さについて，物語終盤では語れるようになっていることがわかった。そのような変化から，本作における「語ること」が果たした役割についても分析する。

キーワード：アン・ファイン，語り，ヤングアダルト

Abstract　This article is an attempt at decoding some of the narrative techniques used to construct Natalie's narrative in *The Tulip Touch* by Anne Fine. An analysis revealed how she distorts her memories for her convenience to defend herself. She focuses on Tulip's wickedness, hiding her own wickedness and her incomplete family. In addition, this study analyzed how emotions change when Natalie narrates and when Natalie is described. Results indicated that Natalie's emotions changes when she related distant memories. She was unable to talk about her own weaknesses at first but she became able to do so at the end of this story. The role of 'narrative' in this play is also analyzed based on these changes.

Key words：　Keywords　Anne Fine, Narrative, Young adult

序章

1. 研究背景・目的

The Tulip Touch はイギリス人作家 Anne Fine によって著され，子どもの非行を描いた作品とイギリス国内外で注目されてきた。読者の視線はとりわけ，荒れた家庭環境で育ち，心に闇を抱えた非行少女の Tulip へ向いている。一方で，本作は全編を通して Tulip の友人である Natalie が過去を回想する形で語った物語である。つまり，読者が注目する Tulip を作り上げたのも Natalie なのだ。Natalie の語りを分析すると，Natalie は作中いくつかの語りの操作を行い，自身の回想を自己都合で歪ませていることがわかった。

この研究では，そのような Natalie の語りに注目することで，語りの視点から新たな Natalie 像を得ること，また，そこから本作における語りが果たした意味を発見することを目的としている。

2. *The Tulip Touch* に向けられる視線

The Tulip Touch に関してインタビューや書評を参照し，同作品の評価を整理する。*The Tulip Touch* は

*　日本女子大学大学院　人間生活学研究科　人間発達学専攻
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Science,　Japan Women's University

主人公 Natalie が自身の小学校高学年から中学生までの時期を Natalie 自身が振り返り，語る物語である。親の仕事の都合で引っ越しをした Natalie はその引っ越し先で Tulip と出会う。Natalie は Tulip の抱える闇に翻弄されながらも，やがてお互いを唯一無二とする共依存的な関係に陥っていく。Tulip は作中，炎に異常なまでの興味を示し，ついに町外れの家畜小屋に放火をする。Natalie の Tulip に対する盲信は年月とともに薄れて行き，やがてこの放火事件をきっかけにふたりの特別な友情は破綻を迎える。

上記で述べたように，本作の書評の多くは Tulip に注目したものである。例えば，Tulip が非行に走る原因はその家庭環境にあり，生まれたときから邪悪な子どもなど存在せず環境が子どもの闇を作り出すのではないか，というような書評が多く寄せられている。日本で *The Tulip Touch* が灰島かりの訳により『チューリップ・タッチ』として評論社から 2004 年に発行された際に，帯に採用された言葉は「生まれつき邪悪な人間なんて，いない！」であった。この言葉は日本語訳の小説内でも登場せず，帯のために練られたものである。この言葉こそ，本作を読者がどのように受容したいと願っているか象徴しているように感じる。一方で，主人公 Natalie の存在感は限りなく希薄であり，言及されたとしても Tulip と対比する際の「いい子」の基準となるだけである。しかし，この物語は Natalie が語ったものに過ぎない。「いい子」の Natalie も，邪悪な Tulip も，そしてふたりを取り巻く環境も全て Natalie が見たものに過ぎず，Natalie が語ったものなのである。もし，Natalie が真実と違うことを述べていたとしても，読者はそのことに気がつく術はない。つまり Natalie は語ることで，読者の目を Tulip へ向かわせることに成功しているのだ。そのため，本作を分析する際には本作が Natalie の視点である，ということを意識する必要があると考えられる。Natalie を語り手として認識し，今まで欠けていた Natalie の視点を追うことで新しい *The Tulip Touch* 像を発見できるのだ。

加えて，Fine は「教育が自分を守り，もし環境が違えば自身も Tulip のようになっていたのではないか」と述べている [1)]。Tulip の抱えていた闇は Fine にとって特別なことではなく，誰しもが Tulip となる可能性を有しているのである。つまり，Natalie も Tulip のような邪悪さを秘めているのではないか。しかし，多くの書評が Natalie を Tulip と対比し「いい子」と述べてきたように，Natalie は作中，徹底的に Tulip の影に隠れ，いい子であり続けようとしている。その清廉潔白さは異常であり，Natalie は自身の語りで自身の優等性ぶりを過剰に演出していると考えられる。従って，本作の Natalie の語りに注目する際は特に Natalie の語りの操作によって何が隠され，反対に何が過剰に演出されているかという点に着目し分析を行っていく。

本章　*The Tulip Touch* の語り

1. 語りの操作

The Tulip Touch における語りの分析を行う。本作は回想型の作品であるため，これから語る内容を経験し終えている「物語る Natalie」とこれからそれを経験する「物語られる Natalie」では経験値に違いが生じており，ふたりは違う視点を持っていると考えるべきである。両者の区別においては地の文は「物語る Natalie」の視点が混入しているものと考える。反対に，実際の行動や発言はその当時の Natalie の考えから行ったことと考えられるため，それらを「物語られる Natalie」の心情を判断する材料とする。

まず初めに，物語開始時における Natalie の状況を分析する。1 点目は誰かから必要とされることを欲しているという点である。これは，自身の母親が自分よりも弟を優先していること，また，転校してきたばかりで友達がいないことに由来している。2 点目は「いい子」へ固執している点である。Natalie は作中「荒れた家庭環境が心の闇を育てる」という大人のコメントをつぶさに拾い上げている。Natalie はその言葉を逆説的に捉え，「幸せな家庭なら良い子が育つ」，つまり，「いい子の家庭は幸せである」と思い込み，自分の家庭が幸せだと信じるために自身がいい子であり続けようとしているのではないか。物語開始時から「物語られる Natalie」は両親や教師へ表向きは従順な様子を見せている。さらに，Natalie の家は家族でホテルを経営しており，「家庭」と深く密接したホテルである。常に自身と家族が客から見られているために，より完璧な家族であることを意識しなければならず，不都合なことは隠す癖があるように考えられる。また，詳しくは後述するが，「物語る Natalie」も物語初期は自分のずるさへ言及をしない，親の不完全さを指摘しないなど，い

い子の自分に固執していることがわかる。以上のように，誰かから必要とされたい，また，いい子でありたい，ということが当時の Natalie および物語を述懐する Natalie の行動原理であると考える。

実際の語りの分析を行う。本書は時間経過に合わせた 3 部構成になっているが，本研究では時間の経過を参考にしつつ，心情の移り変わりに着目した独自のパートへ分類した。また，Natalie は大きく分け，①繰り返し，②言及しない，③とぼけることを用いて語りの操作をしているため，この 3 点を元に分析する。

まず初めに第 1 部第 1 章から第 6 章までの第 1 パートである。このパートで Natalie は Tulip と出会い，友達になる。「物語られる Natalie」の言動を見ていくと，最初に Tulip に声をかけたのは Natalie である。他にも，Tulip 以外のクラスメイトに遊びに誘われても Tulip の方が良い，と拒む姿や，Tulip に会いに行かせて欲しいと父親へ頼む姿が見られる。また，Tulip と共にふたりで作ったオリジナルの遊びに没頭する様子も見られ，「物語られる Natalie」は Tulip とふたりの世界に没頭していることがわかる。

一方で，「物語る Natalie」はこの頃を語る際にどのような心情であったか，語りを分析し考察する。語りの特徴の①繰り返しでは，Tulip と Natalie には友達がどちらもいないこと，また上述の，ふたりにしかわからない遊びの名称の繰り返しが多くの場面で見られた。この遊びはルールの説明などが読み手にされることがないことから，物語を語る Natalie は自身と Tulip が当時，ふたりだけの世界にいたということを強調したいのだと考えられる。②の言及しない，は本パートでは見受けられなかったため省略する。③のとぼけるに関しては特徴的な場面が 2 点あった。1 点目は親のずるさに対して言及をしない場面である。

> I look back and think I must have been mad. What sort of friendship is it when one of the pair is hardly ever there, and the other is never permitted to go off and find her?
>
> On this, my father was adamant.
>
> ‘I’m not even discussing, it, Natalie. You are not going over to Tulip’s house. She can come here as often as she likes. But you’re not going there. And that is final.’
>
> Why was he so firm about it? What had he seen that first day that made him so convinced the Pierces’ farm was no place for a daughter of his? [2)]

上記のシーンは，父親に Tulip の家に行ってはいけないと言い含められる場面だ。この場面の前で，Natalie と父親は Tulip の家を目にし，その異様な雰囲気からその家庭が普通ではないことを察している。Natalie はその父親から自分の娘を優先し，荒んだ家庭にいる Tulip に関わらないようにする自分勝手さを感じたのであろう。しかし，感じたように語ってしまうと父親が不完全な親であり，自分の理想とする完璧な家庭ではないことを述べなくてはならない。そのため，それを避けるために気がつかないふりをしているのである。ほかに，Tulip と仲良くなりたい理由についても Natalie はとぼける技法を使用している。

> […] Was I just being stubborn? What sort of magic did she have for me? All I know is I never made the effort to find another friend. I didn’t even put myself out to steal enough good things from the kitchens to wheedle my way into one of the school gangs. [3)]

この場面は Tulip と仲良くなりたかった，と「物語る Natalie」が語る場面であるが，ここ以外でも物語中，仲良くなりたかった理由を Natalie が具体的に言及するシーンはない。ここでは，magic という曖昧な言葉を使い，その理由を誤魔化している。このように語る理由は，「物語る Natalie」が承認欲求を満たすために Tulip と友達になったと正直に述べることができないためだと考えられる。転校してきたばかりで友達のいなかった Natalie がいつもひとりぼっちでクラスの除け者である Tulip をわざわざ選んだ理由は Tulip が自分だけを見てくれそうだと感じたためだろう。当時の Natalie がそれに自覚的であった可能性は低いが，「物語る Natalie」は当時の自身の承認欲求を自覚していると考えられる。そのため，欲求のためだけに友人を選んだ「いい子」ではなかった自分を隠すために，magic という曖昧な言葉を用いているのだ。

以上のように第 1 パートでは，「物語られる

Natalie」は Tulip に強く惹かれふたりの世界に没入している。また，上述した Tulip で承認欲求を満たす自分には，この時点では無自覚であると考えられる。一方で「物語る Natalie」はその承認欲求をすでに自覚している。そうでなければ，欲求を隠すことはできないからだ。しかし，自身のずるさ，また，親の不完全さを隠しており，それを未だ語ることはできていないのである。

続いて第 2 パートの語りの分析を行う。第 2 パートは第 1 部 7 章から第 2 部 4 章までとした。第 1 パートからの移り変わりのきっかけは Natalie が実際に Tulip の家へ行き，その荒れ果てた家庭の様子を目撃したことから起こる Natalie の心情の変化である。Natalie は「普通」ではない Tulip の家庭環境を実際に目にすることで，えも言われぬ恐ろしさとともに Tulip に対し優越感や同情心を抱き始めたと考える。実際，「物語られる Natalie」は Tulip の家へ行ってから，Tulip に対し同情を伴った行動を取るようになっている。

> […] Nobody else could stand the embarrassment of pretending that they believed her (Tulip) awful lies.
>
> ‘The army’s borrowing one of our fields today. When I get home, they’re going to let me drive a tank.’
>
> ‘Oh, I really believe that, Tulip!’
>
> ‘So likely!’
>
> They’d walk off, scoffing. […] But instead of just walking away, exasperated, like everyone else, I’d try taking her arm and distracting her.
>
> ‘Want to play Road of Bones on the way home?’ [4)]

Natalie は上記の引用のように，Tulip が嘘ばかりつくことを分かっていながらも従うように Tulip に付き添っている。加えて，Tulip にとって不都合な話題であることを察し，さりげなく話題を逸らしているのだ。ここから，「物語られる Natalie」は Tulip に対し哀れみの感情を抱き始めていることがわかる。さらに，一緒にいてあげる，助けてあげる，という言動から恩着せがましい態度で Tulip を見下す様子も窺える。

また，「物語られる Natalie」はこのパートで主体性を薄め，Tulip の言いなりになる遊びに夢中になる。

> I’d try and lay myself open to it, and be a blank slate in case it really could happen. And that felt so weird and puppet-like that I came to enjoy it. Soon, even when we were busy with other things, I’d secretly be playing *The Tulip Touch,* practically inviting her in. [5)]

このように，Natalie は自身の感情や意思を自ら停止させ，Tulip の傀儡となる遊びに *The Tulip Touch* と名付けて，自分だけの秘密として楽しんでいる。なぜ，このような危険な遊びに Natalie は夢中になっているのか。それは，Natalie に Tulip への憧れ，ともすれば邪悪なことへの憧れがあったからだと考えられる。第 2 パートに入る直前で，Natalie は Tulip が亀の殺し方を知っているにもかかわらず，自分は知らなかったことに対して，拗ねるような態度を見せている。これは自分がそのような悪事を知らないことに腹を立てているのではないか。つまり Natalie は「いい子」でいないといけないと思いながらも，相反する「邪悪な子」に魅力を感じ，そのような悪いことをしたいという衝動をずっと押さえつけているのだ。Tulip と一緒にいる理由も，最初は友達が欲しいという単純な理由であったかもしれないが，Tulip がどんな悪いいたずらをしても離れないのは Natalie 自身もそういったいたずらや大人への反抗に魅入られているからだと考えられる。また，そのような邪悪への羨望を持ち合わせた中で，“Tulip Touch Game”に没頭しているのは，「いい子」である自身が Tulip に付き合うための言い訳であるとともに，自身の悪への欲求を Tulip の行動に転移させて満足するためなのである。以上のように，第 2 パートでの「物語られる Natalie」は単純に Tulip とのふたりの世界に没頭していた第 1 パートから大きく変わり，Tulip に対し，同情心や優越感を抱き始めている。さらに，自身の胸に燻る悪への欲求を満たすために，主体性を手放し，Tulip に移し変え依存している。

「物語る私」である Natalie はこの第 2 パートをどのように語っているのか。まず，語りの特徴①の繰り返しでは，学校で Natalie と席を離すと言われて激昂する Tulip の様子から，Tulip が Natalie を求めていることや，また，Tulip に Natalie 以外の友達

がいないことを示唆する場面を繰り返し語っている。加えて，②の言及しない，という語りの特徴では，Natalie 自身にも Tulip 以外に友達がいないのにもかかわらず，自身に友達がいないことは一切描写しないといった例が挙げられる。これは，Natalie が「Natalie しかいない Tulip」と「Tulip を選んで友達でいてあげる Natalie」という関係を演出したいが故の語りの操作であると考えられる。しかし，このような語りの操作からそのような優越感を抱いていたことは仄めかしてはいるものの，はっきりと明言するには至っていない。このパートを語る「物語る Natalie」は当時，自身が Tulip に対し優越感を抱いていたことは自覚しているものの，未だ口に出すことはできないでいる。

また，語りの特徴③とぼけるでは前回の第 1 パートと同じ傾向が見られた。

> Nobody else could stand the embarrassment of pretending that they believed her awful lies.
> ‘The army’s borrowing one of our fields today. When I get home, they’re going to let me drive a tank.’
> […] They’d walk off, scoffing. I’d stare at the ground, and, guess what, I’d feel sorry for her. [6)]

前述の引用部分ではあるが，ここで Natalie はクラスメイトの前で堂々と嘘をつく Tulip に居た堪れない感情を抱いている。しかし，Natalie は“guess what”ととぼけ，Tulip を可哀想に思う理由の言及を避けているのである。Natalie が語りを操作し，語ることを曖昧にした理由は以下の場面に関係していると考える。

> Once she was gone, he turned to Mum.
> ‘Poor little imp. What sort of squashing must she get at home, to think she has to make up all this stuff to impress us?’ [7)]

この場面は Natalie の父親が，Tulip が嘘をつく理由について母親に話す場面である。Natalie は回想する際に，日々を満遍なく語るわけではなく，3 年間という長い期間の中で，自身の印象に残ったこと，あるいは，自身のために語っておきたいことを選んで語っている。そのため，この父親と母親の Tulip についての会話も当然意図があって選択をしているのである。Natalie はこの「嘘をつく Tulip は可哀想だ」という父親の話に納得をした上で，Tulip を可哀想な子として演出するためにこの両親の会話をわざわざ描写したのだと考えられる。

Natalie の中には Tulip が嘘をつく行為を可哀想だと思う気持ちがあったのであろう。しかし，Tulip を可哀想だと語ってしまえば，友人を見下す自身の感情も表われてしまうため，先ほどの場面では“guess what”とごまかしたのだ。「物語られる Natalie」も「物語る Natalie」も Tulip に対し，同情心や哀れみを感じているものの，「物語る Natalie」は自身がそうした感情を友人に抱いていたことはまだ語れないでいる。

一方で，Natalie は自身が言及しない代わりに周囲の人が Tulip を可哀想な子どもだ，と語る場面をわざわざ描写している。例えば，学校の校長に Natalie が呼び出され，Tulip にあまり近づき過ぎない方が良い，と警告される場面では，校長が Tulip の恵まれない環境について話す場面を語っている。①～③の特徴の大枠には含まれないものの，こうした自身の「いい子」でいたいという思いから語ることのできない領域を，他人に代弁させる，というやり方も Natalie の語りの特徴の一つである。

さらに，親の不完全さから目を逸らすという策略もこの第 2 パートでは引き続き行っている。“Far, far more disturbing, somehow. I can’t really explain. All I can tell you is that Mum was looking at Tulip the way no one normally looks at a child.” [8)] これは Tulip のいたずらが原因で Natalie が怪我をし，母親と病院へ向かう場面である。自身のせいにもかかわらず，車窓越しに Natalie を馬鹿にする Tulip に対し，Natalie の母親は憎悪を露わにする。しかし，Natalie はこの場面で“I can’t really explain.”と理由を述べることを拒否している。ここで，Natalie の母が嫌悪感を抱いた理由は自身の娘を怪我させ，尚，からかう Tulip に怒りを覚えたからである。だが，Natalie はそんな母親を自分の子ども以外の子どもに嫌悪感を抱く恐ろしい母親と解釈したのだろう。従って，Natalie は母親の怒りの理由を述べないという語りの操作を行ったのだ。

以上のように，この第 2 パートでは，「物語られる Natalie」と「物語る Natalie」両方に心境の変化が起きている。「物語られる Natalie」は Tulip に優

越感や同情心，哀れみを感じ始めている。また，自身の反抗心，悪への羨望を満たすために主体性を手放し，Tulip の意のままに行動する遊びに夢中になり，悪への欲望を Tulip へすり替えている。一方で，「物語る Natalie」はこの頃の自分に優越感や哀れみがあったことを自覚しているものの，いまだにそれを語れていない。家庭の不完全さに対しても，自身の親が完璧な人間ではない，と気がついているものの同様に語ることができない。このパートを語る Natalie にとって，自身の心の弱さや親の不完全さとは，気がついているからこそ触れたくない部分なのであろう。だからこそ，Natalie はそうした闇を語りの操作で隠そうとしているのである。

最後に物語の終結部である第 3 パートの分析を行う。まずは「物語られる私」の心情の変化を追って行く。第 2 パートから第 3 パートへの切り替わりは第 2 部 4 章で Natalie が Tulip への反抗に初めて成功することである。Natalie はうさぎの耳を掴む Tulip に，思わず強い口調を使いそれをやめさせる。Natalie はこの場面で主体性を委ねる遊びをやめ，初めて Tulip に反抗的な態度を取ったのだ。この反抗をきっかけに，Natalie は怒りの感情を次第に露わにし始める。この場面に限らず，第 3 パートの Natalie は不機嫌な雰囲気を常に纏わせているのだが，何かに対し怒るという行為は主体性がなければ起こらない感情の動きなのではないか。自分の価値観や行動原理がなければ，そこから外れる行為に怒りは抱かないのである。つまり，第 3 パートの Natalie は “Tulip Touch Game”の依存から抜け出し，主体性を取り戻したのだ。そして，Tulip と行った家畜小屋への放火を契機に「物語られる Natalie」は Tulip から離れることを決断する。

> But this time it was Tulip tugging at my arm.
> ‘Natalie! Natalie!’
> I shook her off. The only thing I wanted was to stand and watch this great orange dragon leap higher and higher. [9)]

この場面で Tulip と Natalie はいたずら現場において今までと逆の反応を示す。それまでは，いたずらをし，誰かに見つかり怒られることを恐れる Natalie が，怒られることを恐れない Tulip を引っ張って現場から去っていた。しかし，この放火事件では警察を恐れた Tulip が Natalie を強引に動かし，現場を後にしている。今までのいたずらと，今回の放火で異なっているのは犯罪としての規模の大きさと Natalie の心境の変化である。Natalie はうさぎの件で Tulip への反抗に成功してから，この放火事件まで静かに，そして確実に自身の主体性を育んでいたのだ。この語りは「物語る Natalie」が行っているため，当然，本当に当時の Natalie が友情の終末を感じ取っていたのかは疑うべきところではある。しかし，この放火事件の直後から Natalie ははっきりと Tulip を拒絶し始める。

> And there I lay, grinning up at the fronds that had closed over my head. She’d never find me now. I was safe in the green dark of jungle, of deep, deep, sunless pools. I lay on my back and listened as she called.
> ‘Natalie! Natalie! Come out, stupid! It’s raining!’
> The first few drops pattered through the whispering fronds. The dripping turned into trickles, but I didn’t move. Let her call. Let her search for me. [10)]

この拒絶が示すように，「物語られる Natalie」もこの事件を契機に Tulip への依存から解き放たれた。なぜ，Natalie は Tulip から離れる決断をしたのか。それは上記引用で見られる小屋から頑なに動かない Natalie の様子から窺える。逃げようとする Tulip と頑なに動かない Natalie は我慢比べをしているようだ。ここでの勝負が Natalie にとって，火を見続けることであるなら，この場の勝利者は Natalie である。つまり，Natalie はずっと密かに憧れていた Tulip の闇を初めて上回ることができたのだ。第 2 パートでは，Natalie は自身に燻る悪への羨望を，主体性を薄め Tulip にすり替えることで満足していた。しかし，この放火事件の場で Natalie はその憧れていた邪悪さを上回ることができたのである。この時点で，「物語られる Natalie」の Tulip への欲求の移し替えは終了した。Natalie は Tulip に勝利したことで，憧れていた邪悪さの底へとたどり着き，こんなものだったのかと Tulip への興味を段々と薄めて，自身で反抗する力を勝ち得ていくのである。

そのように，反抗が自分自身でできるようになった「物語られる Natalie」は自身が今まで抱いてい

ながらも自覚していなかった，あるいは発露できなかった自身の不完全さを徐々に表に出していく。

> Now, when we met in the corridors, I'd smile, and say hello, and mutter something about meeting at break. But at the same time, I'd be taking care to glance at the great lumpy hems on her second-hand school skirt, with all the ugly stitching showing through, or at the ragged hair she cut herself, so I could will myself to think:
> 'You're nothing, Tulip. Nothing.' [11)]

このように，Natalie は自身が Tulip を軽蔑し，哀れんでいることを次第に自覚し始める。そして，Tulip は人から軽蔑されるような人間である，ということに気づいたからこそ，その Tulip と一緒にいる自身も同様に見られていることに気がつき，Natalie は Tulip を徹底的に拒むのである。さらにこのパートで「物語られる Natalie」は，見ないようにしていた親の不完全さも直視し，そのような親に反抗をし始める。

> 'But she doesn't have much of a life, does she? So it might be nice.'
> Inside, I was seething. So that was it! I'd fought so hard to get free, yet here were both of them quite ready to throw me back, just to ease their own guilty consciences. They knew as well as I did she hadn't been in the Palace for weeks. But how could they feel as Christmassy as usual, if Tulip wasn't there, to make them feel even more giving and generous, with Dad feeding her titbits, and Mum whispering to the guests.
> 'Oh, yes. She has a pretty thin time of it at home. So we do try to give her at least one really special day.' [12)]

この場面は両親にクリスマスに Tulip を誘うことを打診される場面である。ここでは「物語られる Natalie」は気がつかないふりをしていた自身の親のずるさにようやく踏み込み，自身の怒りのままに反抗している。このように，第 3 パートでは「物語られる Natalie」の心情面に大きな変化が現れる。第 1 に自身の主体性を薄め，Tulip に自身の欲求をすり替える遊びから脱却し，主体性を勝ち得ている。また，第 2 に Tulip への憐れみ，蔑みの感情を自覚し始める。第 3 に自身の家庭が不完全な家庭であると直視している。このような心情の変化が，*The Tulip Touch* にて語られる年月で「物語られる Natalie」が辿った軌跡である。

続いて，この第 3 パートを語る Natalie にはどのような変化が起こっているのかを見ていく。語りの操作では，①の繰り返しで Tulip のマイナス面の描写とそのような Tulip を蔑む自身の感情表現が合わせて何度も描いている。今までの「物語る Natalie」は当時の自分が Tulip に対し侮蔑や哀れみの感情を抱いていたことに気がついていたが，その感情を述べることはなかった。しかし，この第 3 パートでは今まで避けてきた Tulip の嫌な面や，それを自身がどのように疎ましく感じていたかを繰り返し語るようになっているのだ。また，「物語る Natalie」と同様に自身の親のずるさに目を向け，それも繰り返し語っている。例えば，Tulip について事情聴取をするために警察が Natalie の家を訪問した場面である。母親は Tulip に対する嫌悪感を隠さず，さらに警察官から Tulip を蔑む気持ちを隠さない様子を不快に思われている姿を Natalie は語っている。それまでの「物語る Natalie」は親の不完全さに気がつきながらも，積極的に語ることはしなかった。話の進行上，触れざるを得ないときはわざと分からない自分を演じ，親のずるさを指摘することを避け続けてきた。しかし，このパートでは今まで描写すらなかった両親の Tulip に対する話し合いなどをわざわざ描写し，自身の親の事なかれ主義や体裁を気にする性質を批判的に語っている。以上のように，この第 3 パートの「物語る Natalie」も「物語られる Natalie」と同様に，大きな心情の変化があるとわかる。

しかし，このパートで唯一「物語る Natalie」が最後まで語れなかった部分がある。それが，Tulip と仲良くなり，そして離れた理由である。第 1 パートで触れたように Natalie は Tulip と仲良くなりたい理由を具体的に述べることなく，magic という曖昧な言い方でごまかしていた。Tulip との別離を決めた理由に関しても同様で，Natalie は唐突に友情の終結を語り始める。具体的に Tulip のどこに嫌気がさしたなど理由を明確に語ることはないのだ。また，別の描写では再び spell という煙に巻くような非常に抽象的な単語を使用しながら，Tulip の魔法がも

う効かなくなったのだと友情の崩壊を仄めかしている。Tulip と仲良くなりたかった理由は第 1 パートで分析したように，自身の承認欲求を満たすためだけの理由である。また，問題行動を起こす Tulip を見放すことなく側に居続けたのも，自身が隠し持っていた邪悪への羨望を Tulip に移し変えて満足するためであり，おおよそ「いい子」を装う Natalie には語れない理由である。だとすれば，Tulip から離れた理由も自分本位な理由なのではないか。

Tulip と離れる決断をした瞬間は放火事件で Natalie が勝利した時である。その際，Natalie はふたりの友情が終わったと確信している。つまり，邪悪への欲求を満たすために Tulip と一緒にいた Natalie は勝利した瞬間に Tulip の側にいる理由を失ったのだ。Natalie が Tulip を捨てた理由は Tulip が Natalie にとって用済みになったからだ。しかし，「物語る Natalie」は最後までその理由を直接語れていない。したがって，自分勝手な理由で Tulip に近づき，利用し続け，用が済んだ瞬間に見放したことこそ，「いい子」の Natalie がついに語れない自身の心の闇なのである。Natalie は自身の身勝手さに気が付いていたか。Natalie は仲良くなりたい理由をひたすら誤魔化し続けている。次第に凶悪になっていく Tulip が他のクラスメイトから嫌われている描写を描いているにもかかわらず，自身がなぜそんな Tulip を見限らず側にいるのか決して語らない。そして，友情の崩壊を宣言しながら，その理由にも触れなかった。作中，Natalie は Tulip との友情に関して理由を語ることを避け続けているのだ。理由を誤魔化す，言及しない，などの語りの操作は隠したいものを明確に認識していなければ，それを隠すことはできない。したがって，Natalie は自身と Tulip の友情における自らの身勝手さを自覚していたと考えられる。Natalie は自らの最大の心の闇，過ちに気がつきながらも最後まで語ることができなかったのである。

以上のように，*The Tulip Touch* を Natalie の心情の変化に着目して区分した 3 つのパートにおける，それぞれの「物語られる Natalie」と「物語る Natalie」の変化を追ってきた。「物語る Natalie」の語りの操作から見られる邪悪さへの羨望，家庭へのコンプレックス，また，Tulip との友情における身勝手さは *The Tulip Touch* が，Natalie 自身の回想型の語りだからこそ描くことのできた心情である。登場人物，特に Natalie のように自分がどのように見えているかということに気を配り，理想の自分を繕うことが上手な人物の心の奥底に隠し持つ心情を読み解くことができたのは，本作が語り手の心情が語りに影響する一人称回想型であったからこそ浮き出た語りの特徴なのだ。

2. 語りを通した自己整理

既に述べたように *The Tulip Touch* は回想型の作品である。物語を語る Natalie の時制と，その物語内の Natalie，という 2 つの次元が存在している。作中では，そう多くはないがその当時の出来事に関して「物語る Natalie」からコメントが挟まれることがある。そうした場合，大抵が当時の自身の非を認めるような発言であり，自身の非の告白とともに「今思えば，悪いことをした」といった旨の発言が添えられている。捕捉的になるが，この時制の挿入を語りの操作として捉えるのならば，「今思えば，」というような発言は「物語る Natalie」の時制からのフォローであると考えられる。自身の行動や発言が非難されることだと自覚しながらも物語の進行上，語ることを避けられない，もしくは都合の良いように誤魔化すことができない場合にこうした挿入を行い，自身で先に自己批判をすることで聞き手からのさらなる批判を避けているのである。

さて，「物語られる Natalie」と「物語る Natalie」を合わせた時制において，最も年少なのが「物語られる Natalie」の第 1 パートである。全ての始まりであるこの当時の Natalie は自身の持つ邪悪さに無自覚であり，また，家庭の不完全さから目を背けている。そのような「物語られる Natalie」は Tulip と過ごしていく中で，Tulip に対し優越感や哀れみを感じ始め，また，自身の邪悪への羨望を Tulip に移し変えることで満足している。そして，Tulip からの別離をきっかけに自身の心の邪悪さや家庭の不完全さへの直視を始めるのである。ここまでが，「物語られる Natalie」が Tulip との出来事の中で辿った変化である。一方で，「物語る Natalie」は自身や親のずるさを自覚しているがゆえに，それを最初は語ることができず語りの操作で隠している。しかし，語りを行っていくうちにその隠してきた自身の心のうちを語れるようになった。このように，*The Tulip Touch* の物語が始まる時点で，「物語られる Natalie」と「物語る Natalie」では経験値の差ができている。

「物語られる Natalie」は当然，これから Tulip との出来事を経験するため，経験値的には何も得ていない状態である。一方で，「物語る Natalie」は語り始める時にすでに Tulip との友情の破綻を経験している。つまり，「物語られる Natalie」が行き着いた自身のずるさや親の不完全さの自覚をした状態で，語り始めるのだ。この自覚があった状態からの始まりだったからこそ，第 1 パートから見られた語りの操作が可能だったのだ。例えば，第 3 パートで発露が見られる Tulip への蔑みは「物語られる Natalie」が第 3 パートで初めて気が付き，表出するようになったのではない。Natalie はすでに Tulip との友情の崩壊を通して，第 2 パートの時期にも自身が優越感や哀れみを抱いていたことに気がついていた。しかし，語る Natalie は第 2 パートを語る時点ではそういった感情を自身が抱いていたことを口に出すことができないでいる。だからこそ語りの操作で隠しているのだ。*The Tulip Touch* はこのような 2 つの時制が存在する回想型における，2 つの視点を最大限に利用した語りの作品であると言えよう。

しかし，これだけ典型的な回想型の語りである一方で，多くの作品とは異なっている点が存在する。それは「物語る私」と「物語られる私」の成長の具合についてである。一般的な回想型の作品では，作品開始時に存在する「物語る私」と「物語られる私」の経験値の差が物語終了時，つまり「物語る私」が語る内容を「物語られる私」が経験し終えた時点で，この 2 人の経験値の差は埋まる，という指摘が Genette によってされている [13]。したがって，「物語られる私」は成長するのに対し，「物語る私」は語る行為をするだけで成長することは少ない，ということである。本作においても一般的な回想型と同様に，物語開始時に経験値の差が存在している。しかし，物語終了時にも経験値の差というのは埋まっていないように感じられる。先述の通り，「物語られる Natalie」は Tulip との日々を通して自身の心の内や家庭への認識を深めた。そして，「物語る Natalie」はそのような認識を物語開始時から引き継いでおり，さらに回想を行うことで，語り始めた時には語れなかったことを，語り終える頃には語れるようになっているのだ。つまり，本作においては「物語られる Natalie」と同様に「物語る Natalie」も変化をしているのである。

以上のように，*The Tulip Touch* は「物語る私」も語りを通し変化するという点が一般的な挿入的な形式と比べ，大きな特徴であると考えられる。また，Natalie にとっても前述のように語りを通し，心情の変化を起こしていることから Tulip との日々を自身の言葉で語ることが重要な意味を持っていたことがわかる。

終章「語る」行為の役割

本作では語る行為が重要な役割を果たしていた。Natalie は，Tulip との日々を自分の言葉で語ることで，当初は直視できなかった自身の弱さや家庭の不完全さを語り始めた。ここに見られる変化は，第一に自身の状況がある程度客観的に理解できるようになった，ということである。つまり，「いい子」の自分や完璧な家庭が現実的ではない，と Natalie は理解をし始めた。そして，第二にそういった現実の自分を許せるようになった，ということだ。Natalie は自分自身を語ることで，自身の叶わない理想に逃避することを止め，自分の状況を直視し，そしてさらにそういった自分を受け入れられるようになっているのだ。

まず，前者の「自分の状況を直視する」能力は作中，Natalie の周囲の大人たちも持っている。彼らは自らの状況，そして，Tulip の状況を冷静に考えた上で Tulip を自分だけでは助けることができないと判断する。Tulip に惹かれていた Natalie にはそのような大人の様子は事なかれ主義のように映り，Natalie は語りの中で度々大人たちの態度を批判している。しかし，特筆すべきはその Natalie 自身もそういった傍観的な態度を Tulip に取るようになるということである。「物語られる Natalie」は Tulip の巻き起こす渦に巻き込まれながら，確かにそれを傍観する大人たちを嫌悪した。しかし，上記のように Tulip と一緒にいることで得られる悪への充足感を十分に味わったと判断したあとは，自分自身を救うために Tulip と離れる決断をした。その決断をして以降，Tulip とは決して関わろうとせず，Tulip が何か事件を起こしても傍観を決め込んでいる。また，「物語る Natalie」も Tulip と関わることを忌避している。「物語る Natalie」は Tulip と関わったことを後悔するような発言はするものの，あの時こうしていれば Tulip を助けられたかもしれない，といった Tulip を救えなかったことに対する後悔はしていないのである。つまり，「物語る Natalie」も「物語ら

れる Natalie」も問題に巻き込まれないようにただそれを見ているだけの大人たちの反応を嫌悪しながら，そのような大人に自身も次第に近づき，やがて，Tulip の抱える問題は自分ひとりでは解決できるような問題ではない，と理解し Tulip を諦めるのである。

そして，後者の「そうした自分を受け入れる」能力とは，つまり自分を肯定する能力である。Curry は Fine の *A Pack of Lies* と Robin Klein 作 *Hating Alison Ashley* を比較した研究の中で「物語を作ることや語ることで自己肯定感や主観性を得られ，また，語ることが自分の状況を受け入れることを助け，問題に対する解決策へ導いている」と述べている [14)]。この語りを通して起こる精神的変化は Natalie にも当てはまる。Natalie は自身の思い出を語ることで，自分の状況を受け入れ，理想的ではない自分を許せる自己肯定感を得ているのである。

The Tulip Touch の分析を通して考えると，本作において「語る」行為は理想と現実が乖離している苦しい状況から Natalie が抜け出すための手段となったと考えられる。語り始めるために，自身の置かれていた状況を改めて見つめ直し整理し，満足のいかない自分を言葉にして発することでそのような自分を受け入れる，ある種のリハビリのようなものを Natalie は語りの中で経験したのである。本作は Natalie が語った Tulip に焦点が当たることが多いが，時にその語る Natalie とその語りが Natalie にどのような作用を及ぼしているかを考えることで新たな視点を発見することができるのである。

＜引用文献＞

1）Rochman, Hazel. “The Booklist interview: Anne Fine.” *Booklist*, 94:9/10, 810-811（1998）search.proquest.com. Accessed 20 December 2020.

2）Fine, Anne. *The Tulip Touch*. Hamish Hamilton, 13-14（1996）

3）前掲 2），14

4）前掲 2），24

5）前掲 2），68

6）前掲 2），24

7）前掲 2），26

8）前掲 2），52

9）前掲 2），121

10）前掲 2），117

11）前掲 2），126

12）前掲 2），128

13）ジュネット，ジェラール『物語のディスクール―方法論の試み』,花輪光，和泉涼一訳，水声社（1985）

14）Curry, Alice. “Lying, or storytelling, as antidote to unhappiness in Robin Klein's Hating Alison Ashley and Anne Fine's A Pack of Lies and Goggle-eyes.” *Explorations into Children’s Literature* 18:1, 41-47（2008）search.informit.org. Accessed 20 December 2020.

（指導教員：川端有子教授）